
父子の肖像

無銘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父子の肖像

【Nコード】

N7122Y

【作者名】

無銘

【あらすじ】

父を疎んじ、蔑んでいる少女はかつて父を嫌い、反発した男と出会う。男と、男の父が愛した海の上で二人は何を見るのだろうか…。原作崩壊、キャラ崩壊、時系列矛盾、知識不足その他が過分に含まれております。

本作に限らず私が書いたISと仮面ライダーを題材とした『白と銀』、『疾風の心』、『右手袋の先生』、『少女は雷光を見たか』、及び本作は同じ設定及び世界観という前提で書かれております。

（前書き）

本作は原作レイプを通り越して異能生存体もろとも火炎放射器で焼き払うくらいの事をしておりますので十分ご注意ください。

―時々、夢を見る。

―夢の中では炎に包まれた部屋でまだ幼かった私が泣いている。

―怖くて、寂しくて泣いている。

―上から焼けた瓦礫が落ちてくる。

―そこで誰かが私を庇うように上から覆い被さる。

―そしてその人が私に何か言おうとして―そこで目が覚める。

（また、あの夢…）

時計を見ればまだ真夜中だ。

そこで夢を見ていた少女…セシリア・オルコットは再び眠りについた。

イギリス近海を航行している豪華客船『メルクリウス』号。この甲板上に織斑千冬はいた。

彼女はこの船で開かれる『オルコット財団』設立20周年記念パーティーに理事長として出席する『IS学園』での教え子の一人、セシリア・オルコットをエスコートする為にこの船に乗船している。

セシリアは本当はエスコート役として弟の一夏を所望していたが、生憎『銀の福音』との戦いの直後という事で現在千冬の判断で検査入院させている。

その代わりとして千冬が自らその役目を申し出た。仮に一夏に何も無くとも千冬には一夏をやる気など毛頭ないが。

それにこれはセシリアにも内密だが単なるエスコートではなくセシリアの『護衛』も兼ねている。

千冬が旧知のいい加減なインターポール捜査官から『何者かがセシリア・オルコットの暗殺を企んでいる』と連絡を受けたのは、臨海学校が終わったその日だった。

何でも偶然インターポールの情報網に引っかけたらしい。

セシリア・オルコットはイギリスの名門貴族オルコット家の現当主である。まだ子どもの頃に両親を亡くし莫大な遺産を受け継いだが、それを狙う大人達から命すら狙われていた。

それを本人の努力で守り抜き、今ではイギリスの代表候補生となっている。その際にイギリス政府に遺産の保護を条件として出し、認

めさせている。

更に彼女はIS学園の生徒である。学園関係者にはあらゆる国家や組織の干渉が許されないという『外部不干渉』を定めた国際規約が存在する。つまりIS学園の生徒である以上、遺産を狙う者がセシリアに手を出す事は出来ない。

だが暗殺という手段なら話は別だ。セシリアが死ねば嫌でも遺産はそれを狙う者にも入ってくる。しかもそんな事を考え、実行するよくな後先考えない連中に『外部不干渉』の国際規約など意味をなさないだろう。

更に今回の場合『外部不干渉』が悪い方向に働いた。

IS学園関係者への『外部不干渉』の国際規約により、インターポールがいち早くセシリアを暗殺する動きがあるという情報を掴んでも、インターポールはそれを捜査出来ないのである。

国際規約が定めた『あらゆる組織』の中には、当然インターポールも含まれているのだから。

当然セシリアの出身地であるイギリス警察も動く事は出来ない。

そこでインターポールは…というより千冬の知人はIS学園で教師をしている千冬に暗殺阻止と事件解決への協力を要請し、千冬は二つ返事でこれを承諾した。

そしてインターポール側は情報提供等で間接に千冬をサポートすると同時に民間人の協力者を千冬の下に送ってくれるらしい。

「お招き頂き光栄です、セシリア・オルコット理事長。こうしてお目にかかるのは始めてですが、かねがね貴女のお父様とお母様とは懇意にして頂いてまして」

「いえ、こちらこそこうしてお会い出来て光栄ですわ、神敬介博士。貴男の事は前々から母から聞かされておりましたわ」

現在千冬の横でセシリアはフリーの海洋学者『神敬介』と話している。

『オルコット財団』はセシリアの祖父にあたるジョナサン・オルコットの遺言により、学問の振興や研究者の育成を目的に設立された。現在ではオルコット家現当主のセシリアが理事長を務めてはいるが、理事長自体お飾りの意味合いが強く、年齢もあってセシリアの仕事はこうした記念式典的なパーティーに主催者として顔を出す事くらいである。

特にジョナサン自身が生前著名な海洋学者でもあった事から特に海洋学関係の支援に力を入れている。

神敬介も海洋学者としてジョナサンの下に厄介になっていた時期があり、その際にジョナサンの教え子で実の娘でもあるリサ、同じくジョナサンの教え子で後にリサの夫となるジョージ…つまりセシリアの両親と親交を持ったらしい。

とはいえセシリアもそういう話を親から聞かされてはいたが、敬介の言った通りこうして会うのは始めてらしい。

そしてこの神敬介がインターポールの知り合いが千冬のサポートの

為によこした『協力者』である。

乗船の前に合流し自己紹介は済ませてあるが、知り合いから事前に聞いた話では彼のレーサーとしての弟子でもあり、友人の後輩でもあるらしい。

そこで千冬がよく知る男は敬介が招待されると見越して事件解決への協力を要請したとの事だ。

「しかしまあ…想像以上にドレス姿が似合わねえな、千冬」

「か、和也さん!？」

声を掛けられたので振り返ってみると、そこにはパーティーには似つかわしくないラフなジャケットを着た男…千冬を今回の事件に巻き込んだインターポール捜査官『滝和也』がいた。

流石に式典が式典な上にセシリアの傍にいる以上千冬もドレスなど着たくはなかったが、セシリアの頼みもあり渋々ディナードレスを着用している。

その際一度弟の一夏にもドレス姿を見せたが、弟は「すごく似合ってる」と言っていたので大丈夫かと思っていたが…。

神敬介もタキシード姿だし勿論セシリアもドレス姿だ。と言うより皆タキシードがドレスである。

そんな中でいつもの如くジャケット姿で乗船してきた滝和也という男は間違いなく大物である…一夏には死んでもこうなってほしくは

ないが。

だがツツコむ所はそこじゃない。それは重要な事じゃない。

「何故インターポールのあなたが此処にいるんですか!？」

「いや、国際的銃密売組織を追ってたらこの船にその組織が売り捌いてた銃器が持ち込まれているって情報が入ってな。その捜査にきたのさ。勿論セシリア嬢の許可は取ってあるぜ？」

そう言っただけで和也は事もなげに笑う。

インターポールが実際にその情報を掴んだのかも知れないが滝和也の事だ、どうせセシリア暗殺を阻止する為に別件捜査の名目でこの船に乗り込んだのだろう。

確かに『外部不干涉』の規定により、インターポールがIS学園関係者のセシリアが関係する事件の捜査やセシリアの護衛をする事は出来ない。

だが今回の滝が言ったケースのようにセシリアと直接関係ない事件の捜査までは『外部不干涉』の規定に抵触しない。

だから別の事件を追っていたら『たまたま』セシリアが主催する式典が開催されるこの船に乗り込む事になった、という筋書きなのだろう。

勿論こんな事がバレたら国際問題に発展する。滝和也だって今度は停職処分では済まされないだろう。

だが滝和也はそれでも一人の少女が大人達の都合で無為に命を、未

来を奪われる事に我慢ならずこんな手を使ったのだろう、と千冬は確信している。

「滝さん、織斑千冬さんとは前からの知り合いだったんですか？」

「先生、滝捜査官の事を前から知っておりましたの？」

流石にツツコミを入れてる千冬に気付いたのか敬介とセシリアがそれぞれよく知る者に尋ねる。

「いや、知り合いというか…戦友というか…共犯というか…腐れ縁、だな」

二人は全く同じ答えを同時に返す。

千冬と和也の仲は意外と長く、第2回『モンド・グロッソ』決勝戦の裏で発生した『織斑一夏誘拐事件』の解決に協力して当たって以来、事件の事から弟の事まで互いによく連絡を取り合っている。

モンド・グロッソ決勝戦における千冬の棄権の片棒を担いだ『共犯者』である和也を見たら、千冬のドイツ時代の教え子でもあるラウラ・ボーデヴィツヒはどんな反応をするだろうか。

ちなみに棄権した千冬は戒告処分で済んだが、片棒を担いだ和也は一ヶ月程停職処分にされている。

「そうでしたか…ならオルコット理事長、後は私がエスコートしますよ」

「ええ、お願いしますわ。折角のお二人の一時を邪魔する、という

のはいくらなんでも野暮ですもの」

そう言うのと敬介とセシリアは連れ立って和也と千冬から離れる。

敬介はともかくどうやらセシリアは二人の仲を本気で誤解しているようだ。

このセシリア・オルコット、色恋沙汰が絡むと妙に想像力が回るといつか、妄想をたくましくするという妄想癖の持ち主であるらしい。少なくとも千冬にはそう見える。

そんな痛くもない腹を探って現在自分と和也の仲をを絶賛誤解・妄想中であるう教え子に溜息をつきつつも、千冬は表情を引き締め和也に尋ねる。

「本当なら通信で聞くつもりでしたが此处で聞いておきます…首謀者は？」

「まだ確定はしてないが、彼女の親族の誰か…しかもオルコット家の男ってのは間違いないみたいだ」

和也も既に笑っていない。本来ならセシリアには気付かれぬように後で通信しておきたかったが、折角の機会だ。そのまま情報交換を始める。

「そうなるとうイギリス軍のバロネス・オルコット少将、『オルコットグループ』傘下『オルコット・インダストリアル』社長のピーター・オルコット、そして『オルコット財団』副理事長のエド・オルコットの三人に絞られますね」

「ああ、そんな大それた暗殺をやってまで遺産を手に入れたと思うのも、そうすれば確実に遺産が入ってくるのも、セシリア嬢の叔父で現在では一番近い血縁関係にあるその三人くらいだろうな」

セシリアの母リサは有能な実業家でもあり、オルコット家の発展に尽力し、現在ではイギリス屈指の企業集団となっている『オルコット・グループ』を築き上げ、オルコット家に繁栄をもたらしていた。その遺産ともあれば莫大な額であろう。

「千冬、お前はどつだった？」

「船内に何か爆弾等が仕掛けられていた様子はありません。今のところ暗殺者らしき人物は見かけてませんし、もしかしたらこの後…式典開始後から本格的に動き出すのかも知れません」

ふと見ると日が沈もうとしている。そろそろパーティーが始まる時間だ。

二人はそこで一旦会話を打ち切るとパーティー会場となる船内へと入っていった。

（ああ、何て羨ましい…きつとああやってパーティーの中で徐々に徐々にお互いが素直になって…そしてパーティーが終わる頃

になると滝捜査官の方から、織斑先生の方から、どちらともなく素直に互いの気持ちを言い出して…そして二人は…！）

「…オルコット理事長？」

パーティーが始まり挨拶を済ませたセシリア・オルコットは、パーティー会場内を神敬介にエスコートされながら歩いていた。

そしてパーティー会場内で話している滝和也と織斑千冬の姿を見て妄想を…和也が聞いたら腹を抱えて爆笑し、千冬が聞いたら頭が痛くなりそんな内容の妄想をしていた所を、敬介に声をかけられ我に返る。

「も、申し訳ありません神博士！別にお二人が羨ましいとかそんな事は…！」

慌てて謝るセシリアに敬介は黙って苦笑しながら首を振る。

羨ましいのは事実である。セシリアの想い人である織斑一夏は強く、優しく、何より女に媚びないというまさに彼女にとって『理想の男』である。

だがこの織斑一夏に惚れた女性…セシリアにとっては恋のライバルが多い。しかも肝心の一夏は悲しいくらいに自分に対する恋愛感情には鈍感だ。

だからああして二人のように…あくまでセシリアの妄想だが…なることなど当分はないのだから、羨ましく思わない訳がない。

ちなみに敬介が二人の仲を見て抱いた感想は『漫才コンビ』だ。

何せ情報交換のカモフラージュの為とはいえ

「…けど捜査ならわざわざパーティー会場にまで来なくても良かったのでは？」

「そこはよ、俺もたまには旨い酒や料理を楽しみたいって思う時もあるんだよ。だから佐久間にちょっと頼んで…」

「あんた絶対インターポールじゃないだろ！？」

「そう思っても本人の前で口に出すんじゃないえ！」

…さつきからずっとこの調子で話していれば、そうも思いたくなる。

「そ、それよりも母の話をもっと聞かせて頂けませんか？」

「ええ、喜んで。貴女の母親で私の友人でもあったリサ・オルコットは…」

セシリアが誤魔化すように敬介に話題を振ると、敬介はパーティー開始直前からセシリアに話していたリサ・オルコットについて話し始める。

―優秀な学生ではあったがかなり豪快な性格だった事。

―海をこよなく愛し暇さえあれば素潜りをしていた事。

―かなりの酒豪で多くの男が彼女を酔い潰そうとして逆に酔い潰されていた事。

――見しつかりしているように見えて実はかなり抜けていた事。

――英語圏では『デビルフィッシュ』と忌み嫌われるタコを生で平然と食べてみせた事。

――実はタコはまだ生きていて吸盤が張り付き引き剥がすのが大変だった事。

そんな敬介の他愛もない……敬介にとっては懐かしい昔の話をセシリアは熱心に、時に微笑みを浮かべながら聞いていた。

そんな母親を……リサをこよなく敬愛しているセシリアを微笑ましく思いながらも敬介は一つの疑問をぶつける。

「……父親の……ジョージ・オルコットの話は聞かれないんですか？」

するとセシリアは無表情となり吐き捨てるように言い放つ。

「結構です。弱くて、卑屈で、背中に傷を創るような父の……ジョージ・オルコットもといジョージ・シラーの話など聞きたくありませんから」

婿入り前のシラー姓で呼ぶなど相当忌み嫌っているようだ。

「背中への傷？」

「神博士がご存知ないとなると結婚してから付いたのでしょうか……父の背中には大きな火傷の跡が残っていたんです。どうせ火事で逃げ遅れたか何かしたんでしょうけど」

侮蔑すら込めて自らの父に辛辣な評価を下すセシリアに何か言おうとする敬介だったが…

「全員そこを動くな！」

突然大声を上げ覆面を被り銃を持った男達がパーティー会場に乱入してくる。かなりの数だ。

「シージャック!?」

男達は時折威嚇射撃をしながら船の乗員乗客に銃を突き付け徐々に一ヶ所へと追い込んでいく。

「この…!」

「オルコット理事長!ここで下手に抵抗すれば他の乗客にも被害が!ましてISなんて展開すれば…!」

「くっ!…悔しいですが、ここは大人しく従う他ありませんわね…!」

歯噛みしながら敬介とセシリアも両手を挙げ、シージャック犯達に抵抗の意志が無い事を示した。

シージャック犯達により乗客達はパーティー会場内に集められ、銃を持った男達が入出口を封鎖していた。会場のドアの外には覆面を被り自動小銃を持った男達数人が立っている。ドアの内には犯人グループのメンバーは一人もいない。

「クソ、鞆に隠してた拳銃も通信機も鞆自体が取り上げられちまつたし…お前は？」

「…私はそもそも拳銃自体を持ってきていませんし、通信機もやはり鞆の中でしたから」

その人質達が集められたパーティー会場の中で滝和也と織斑千冬は話していた。

シージャック犯に抵抗しようかとも最初は考えた二人だが、他の乗客に被害が出る事を憂慮して大人しく犯人達に従う事にした。

幸いそのお蔭で和也や千冬の素性がバレる事もなく、特に乱暴されることもなく現在には仲良く他の乗客達と一緒に軟禁されている訳だが、手荷物は全て取り上げられてしまった。

「しかも敬介やセシリア嬢、財団役員とか一部の乗客は奴らに連行されちまつたし…」

セシリアや財団の役員など重要な人物は皆犯人グループに連行されていた。敬介はセシリアをエスコートしていた事でその巻き添え

というか、とぼっちりを食ったといった所だろう。

「…和也さん！」

ふと窓の外を見ていた千冬が和也を呼ぶ。

「どうやら船長辺りがSOS出してたらしいな…イギリス海軍のお出ましとはよ」

和也も外を見てニヤリと笑う。

本来こういったシージャックへの対応は沿岸警備隊の仕事だが、イギリスの沿岸警備隊は専ら人命救助が専門である。

その為こういう場合はイギリス海軍が出張ってくる事になる。そして和也と千冬の目にはイギリス海軍が沿岸警備任務で使用する大型哨戒艦がこちらに向かってきている。

それを見ていた二人だが突如として哨戒艦に激しい銃撃が加えられ、炎上する。慌てて二人が視線を動かすと、上空にそいつらはいた。

「馬鹿な！？ISだと！？」

「しかも5機もかよ！？」

そこには5機のISがいた。

最強の兵器であるISに対抗し得るのは同じISしかない。ましてや対人作戦前提の哨戒艦ではお話にならない。

それでも哨戒艦が炎上しながらも辛うじて港に帰港していったのは『フォークランド紛争』の苦い戦訓が生きたからだろうか。

恐らくイギリス側は作戦を建て直す為に暫くは動けないだろう。しかも敵はIS、人質にはイギリスの代表候補生。当分はイギリス側から仕掛けてくる事はほぼ無いと言ってもいい。

つまり外部からの救援は当分の間は見込めない、という事だ。

「だったら俺達が」

「動くしかありませんね」

しかし和也と千冬は顔を見合せ不敵に笑い合つと、外の人間には気付かれぬように天井裏に繋がるハッチを開け、天井裏へと忍び込む。そしてシージャック犯に対して改めて闘志を燃やすのであった。

（彼女は…セシリア・オルコットは無事なんだろうか…？）

船室に閉じ込められた状態で神敬介は思案していた。

他の乗客達から引き離され連行された敬介やセシリア、副理事長を始めとする財団役員達はそれぞれ別の場所に監禁されていた。

敬介が閉じ込められている船室のドアの外にも犯人グループの一員とおぼしき自動小銃を持った二人の男が立っている。

（この近くには俺以外の誰も監禁されてはいないようだし…俺と部屋の前にいる連中以外この階層には人はいないようだな）

敬介はその改造人間としての優れた視覚、聴覚、嗅覚や自分が監禁されるまでの情報を整理することで自らが置かれている状況をおおよそ理解する。

（ならば…少し暴れさせてもらっぞ！）

決意を固めるやいなや敬介はドアの前に立つ。並の人間の力では壊れそうもない鉄製のドアだ。

しかし敬介はドアノブに手を掛けると一瞬でその改造人間としてのパワーを駆使してドアを引き剥がす。

「な…！？」

突如自らの背後で起こった異常事態に二人が硬直している内に一人を殴り飛ばし、もう一人の自動小銃を素手でねじ曲げ、投げ捨てる。

「ば、化け物！」

もう一人の方は恐怖しながらも胸のナイフシースからナイフを抜き、敬介を刺そうと全力で突進する。

だがナイフの刃が敬介に触れると刺さるところか逆に嫌な音を立ててナイフが根元から折れ飛ぶ。

「あ…あ…」

そして恐怖のあまり立ちすくむもう一人を気絶させると、二人纏めて部屋の中に放り込みそのまま走り…

「おっと、いけないいけない」

走り出す前に引き剥がしたドアを立て掛け直し、それらしくすると改めて敬介は走り出した。

「…どうしてもこの書類にサインする気はないんだな？」

「当然ですわ！誰がこんな『私はオルコット家の財産を全て放棄します』などという冗談にもならないふざけた書類にサインなど！」

船室の中でも一際大きく、一際豪華な一室で、セシリア・オルコットはシージャック犯のリーダーらしき男と机とそれに乗せられた書類を挟む形で対面していた。

セシリアには両側から頭に銃を突き付けられているがセシリアは怯む様子もない。

セシリアの前にある書類には両親から受け継いだオルコット家の遺産の相続放棄及び相続権利の譲渡…つまりセシリアが全財産を誰かに譲るという旨が書かれていた。

誰に譲るかは書いていない。先にセシリアのサインだけ貰って後は好きにしようなどと浅はかな事を考えて、こんな効力が発生するかも怪しいふざけた書類を作ったのだらう。

「なら仕方ない。『依頼主』は言うことを聞かなければ殺せとは言っていたが『上役』は極力殺すなど言ってきたるんで…」

男は立ち上がり机を蹴り飛ばし、セシリアを張り倒すと部下と共に部屋を出ながら合図をする。

「少し頭を冷やし…いや、熱してもらおうか」

すると部下達は部屋にガソリンらしき液体をばらまき火を付ける。すると火は部屋の中で盛大に燃え上がり始めた。

「安心しろ、そこで大人しくしてればすぐには死なん。だがこのまま意地を張り続けていればいずれは醜く焼け爛れて死ぬ羽目になるぞ？」

男が嘲るように言い放つが、セシリアには聞こえていなかった。

（あ…あの時と…）

あの時と同じだった。

幼い頃、セシリアは別荘で使用人の火の不始末を原因とする火事に

巻き込まれ、燃え盛る炎の中、部屋の中に一人取り残されていた。

それがセシリアにとってはおぼろ気ながら、しかしはっきりとしたトラウマとして残り続けていた。

だから足が竦んで動けなかった。何も考えられなくなった。

炎はますます燃え盛る。

「おい！何故スプリンクラーが作動しない！？このままでは本当に焼け死ぬぞ！？」

そんな声が聞こえてくるがセシリアは上の空だ。

——このまま行けば私は死ぬ。

——愛する人とも、恋の鞘当てをして、でも一緒にいれて楽しかった友人達とも、もう会えない。

——ただただ一人寂しく、炎に巻かれて苦しんで死んでいく。

——いや——そんなの——いや——

——だれか——だれか——たすけて——

そして天井にまで火が回り、やがて天井が自分の上へと落ちてくる。
そして――

――えっ？

――誰かが――誰かが私を庇うように上から覆い被さる。夢と――あの時と同じように。そして夢で――あの時誰が私を庇って覆い被さったのか、はつきりと思い出した。

「……パパ……？」

――父親――パパだった。

――あの時――小さい時に火事で逃げ遅れた私を助ける為に火の中へと飛び込み、私を助ける為に身を呈して私を落ちてくる瓦礫から庇ってくれたのだ。

――そして『パパ』は――あの時も――そして今も同じ事を言う。

「……ああ。セシリアが、無事で良かった」

――私はなんて馬鹿だったんだろう。私の為に身体を張って――背中に大きな火傷の跡を残してまで助けてくれた父を――パパを――憎んで――蔑んで――馬鹿にして――でもパパは何も言わないで――

「……ごめんなさい……パパ……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

そしてセシリアは『パパ』に抱きつくと言ながら泣きじやくり始める。

遅れてスプリンクラーが作動し、雨のように水が降り注ぎ火が消し止められても、セシリアは暫く『パパ』に泣きながら謝り続けた。

神敬介は監禁状態を脱した後、船中を駆け回り他の人質を居場所を探索していた。

途中のシージャック犯は何かやり過ぎるか、暫く眠って貰う事にした。

自分以外の連行された人質の居場所はほぼ掴んだ。後はセシリア・オルコットの居場所のみだ。

ふと、敬介の嗅覚がガソリンらしき揮発性の液体の匂いを感知する。そして何かが燃える嫌な匂いも。

何か尋常ならざる事態が発生したと敬介は判断すると全速力で走りだしていた。

「おい！何故スプリングラーが作動しない！？このままでは本当に焼け死ぬぞ！？」

と叫ぶ男の声を聞き付けると敬介は即座にそちらに向かう。

そしてそこには立ちこめる黒煙、そしてシージャック犯らしき自動小銃を持った5人の男達。

「何者だ！？」

リーダー格らしき男が高圧的に言い放つが敬介は無視して飛び掛かる。

「ええい！構わん！撃て！撃ち殺せ！」

指示の下慣れた手付きでフルオート射撃を開始する男達だが、敬介は止まらずに当たる銃弾を無視して無理矢理弾幕を突破する。

「馬鹿な！銃弾が効かないだと！？」

驚くリーダー格に飛び膝蹴りを叩き込み黙らせると、手近な奴を背負い投げで地面に叩きつけ、さらに一人に足刀蹴りをぶち込み沈黙させる。

「う、うわああああっ！」

逃げようとする二人に敬介は追いつがると、そのまま二人纏めて襟を掴み地面へと引き倒し、気絶させる。

そして部屋の中を覗くと

「オルコット理事長!？」

燃え盛る炎の中にセシリア・オルコットは、いた。

恐怖のあまりこちらの声も聞こえておらず、足も竦んで動けないようだ。

そこに…セシリアの上に焼け落ちた天井が落ちてくる。

「危ないっ!！」

咄嗟に敬介は身を呈してセシリアの上に覆い被さり、焼け落ちた天井を背中に受ける。

この程度なら問題ない。立ち上がる前にセシリアに声をかけようとする…

「…パパ…?」

彼女と目が合う。

父親を求め、縋る子供の目だ。

かつての俺と、同じ目だ。

勿論俺は彼女の父親…ジョージ・オルコットではない。

だが彼女は俺にジョージを…父親の姿を見ていた。

だから、違うだなんて言えない。

彼女の心を…父親を求める心を踏み躪るなんて、俺にはできない。

だから俺はジョージなら…彼女の父親ならなんて言うか考える。

だけど、俺は父親じゃない。だから父親の気持ちは分からない。

だから、俺は俺の親父が何を思い、何を言い、何を俺に教えたかを思い出す。それがきつと親父の…父親の心だからだ。

そして、親父の…父親の気持ちを、ジョージの言葉に乗せて彼女に…父親を求める彼女に、彼女の父親の代わりとして言うことにした。

「…ああ。セシリアが、無事で良かった」

これでいいんだよな、ジョージ…これでいいんだよな、親父…。

するとセシリアは敬介に抱きつき泣きじゃくりながら謝り始める。

そこで敬介はセシリアの気が済むまで、彼女の…セシリア・オルコットの父親の代わりに優しく抱き締め、その頭を撫で続けていた。

多く乗客達が閉じ込められているパーティー会場の入り口ドア前。

そこには覆面をした男たちが手に銃を持ち、見張りをしていた。

そこへ交代要員らしき二人の覆面をした男達が歩いてくる。

「もう交代か？予定よりだいぶ早いんじゃないか？」

見張っていた男の一人が不思議そうにやってきた男達を見ながら話す。

「ああ、色々と事情があったらしくてな。もう休んでいいそうだし」

そう男の一人は答える。

…いや、おかしい。交代要員にしては二人は少なすぎる。第一さっき答えた方は男にしては背は低めだし声が妙に…女のように高い。何より服装の上からでも分かる胸の膨らみと腰のくびれの差が…

そんな事を見張りの男達が考えているとその答えた男…いや女は目の前の敵の股間を思い切り蹴り上げる。

「…げむっ!？」

あまりの痛みに叫びにもならない叫びを上げ失神する男。

慌てて銃を構えようとするももう一人…こちらは体格からして男と分かる…が突き蹴りを入れ一気に3人を叩きのめす。

女の方も残った男達に手刀や掌打を叩き込み、最後の一人の頭を掴み勢いよく壁に叩きつけ黙らせる。

全員が沈黙した事を確認すると、二人はロープを取り出し、伸びている男達を俗に言う『亀甲縛り』で縛り上げる。

「これで制圧完了、だな」

男の方は覆面を外しもう一人に言う。

「ええ、IS以外は…ですが」

そう答えて女…織斑千冬も覆面を外す。

千冬と男…滝和也は軟禁されていたパーティー会場を抜け出した後、密かに別の場所に軟禁されていた乗員や乗客を救出する傍ら、シージャック犯の一味を片っ端から叩きのめし、同じ要領で縛り上げていた。

そしてパーティー会場入り口の敵を制圧しにいく頃にはシージャッ

ク犯は全て叩きのめされ、縛り上げられていた。

中にはドアが一度引き剥がされたらしい部屋に入って気絶していた二人や、リーダー格らしき男やその取り巻きなど明らかに彼らが叩きのめした覚えがない者もいたが、全員纏めて縛り上げた。

ただ哨戒艦を炎上させたISの操縦者は見当たらなかった。或いは普段は別の場所で待機しており、必要とあれば呼び出されているのかも知れない。

「なら本人に聞くとしますか…シージャックの首謀者、そしてセシリア嬢を狙った真犯人によ」

そう言うのと和也と千冬はまだ船内にいるその犯人から話を聞く為に歩き出した。

「あの、神博士…本当に申し訳ありません!」

「気にしないで下さい、オルコット理事長。そこまで謝られると私の方が…」

先程から顔を真っ赤にして何度も謝るセシリア・オルコットに神敬介は苦笑しながら答える。

あの後30分くらい泣き続けたセシリアがふと我に返ると目の前にものすごくばつの悪そうな顔をしていた敬介の姿が、そして自分が敬介にしていた事を思い出し…現在に至る。

「…そうだ、お父様の…ジョージ・オルコットの話をしめようか」
敬介の提案にセシリアが頷くと敬介はセシリアの父の…ジョージの話が始める。

―リサに劣らず優秀で、それでいて穏やかな性格だった事。

―リサに劣らず海が好きで、暇さえあればいつも海を眺めていた事。

―酒が弱くてリサに付き合わされてはよく酔い潰されていた事。

―一見頼りなく見えて実は芯の強い男だった事。

―リサと結婚した後は女の身で当主となったりリサが馬鹿にされないようにと気遣い、人前では―それが例え実の娘の前であってもわざとリサに卑屈に振る舞い続けてきた事

―そしてたまに敬介に会う度にいつも娘の事を誇らしげに語っていた事。

そんな敬介の他愛もない… 敬介にとっては懐かしい昔の話をセシリアは黙って、ずっと申し訳なさそうに聞いていた。

「私… 父の事を… 何も知らないで… 私… 私…」

「… そんなですよ」

自分を責め続けるセシリアの言葉を敬介が遮る。

「子供って、父親の気持ちや本当の姿には気付かない。そんなものですよ」

敬介はセシリアに笑ってみせると言葉を続ける

「昔の俺も、そうでした。厳格で、頑固で、気難しくて、口うるさくて、不器用で… そんな親父が… 神啓太郎がずっと大嫌いで、ずっと反発してました。口喧嘩なんて数が多すぎて何回やったかも覚えてません」

「俺の母親は俺を産んですぐに亡くなりました。俺は親父に男手一つで育てられたんです。親父は俺が物心ついた時から俺を厳しく育ててきました」

「『科学者には腕っぷしが必要だ』って事で小さい頃から親父に武道を仕込まれてきました。親父のヤツ、手加減つてのが苦手で毎回毎回全力で俺のことを投げ飛ばしてたんですよ？」

「小さい頃から俺は船乗りになりたかったんです。世界中の海を又にかけて、自由に航海する船乗りに…そんな俺に親父は人間工学も学ばせようと口うるさく言い続けてきました」

「いつからですかね、親父に本格的に反発するようになったのは…もしかしたら親父が、俺の名前を間違えて『啓』介として役所に届け出ていた事に、気付いた時かもしれません」

「そして俺は親父とずっとずっと喧嘩して、家を飛び出して、嫌ってきました…あの時がくるまでは」

「…半年ぶりに親父の下に戻った時、俺と親父は『GOD機関』という組織に襲撃されました。そして俺は一度死に、親父は瀕死の重傷を負いました」

「それでも親父は…神啓太郎は…俺の命を…息子の命を救う為に…残り少ない命を懸けて…俺を深海開発用改造『カイゾーグ』へと改造し…息を引き取りました…」

「…俺は、改造人間として生き返り、ようやく俺を助ける為に死んだ親父が…神啓太郎が…俺の深く愛してくれていた事に気が付いたんです」

「…今思い返せば親父は確かに厳格で、頑固で、気難しくて、口うるさくて、不器用で…でもとても優しく、温かった」

「名前もきつと俺が生まれてきた事が嬉しすぎてとちっちゃったんでしょうね…俺は親父が死んでから、やっとそれに気が付いた」

「情けなかった。恥ずかしかった。悔しかった。申し訳なかった。」

苦しかった。後悔ばかりしか沸かなかった」

「でも、俺は立ち止まりません。俺は親父がくれたこの人間としての、改造人間としての二つの身体と、心と、魂を使って、人々の為に『GOD機関』やそれ以外の組織と戦おうと決め、そうしてきました。それが…親父が望んだ事だと思うから」

「だからオルコット理事長、そんなに自分を責めないで下さい。誰だって…俺だってそうだったんです。だけど貴女は今父親の…ジョージの気持ちに、本当の姿に気付けたんです」

「だから、胸を張って下さい。それがきつと貴女の父親が…ジョージ・オルコットが貴女に望んでいる事だから」

そこで敬介は言葉を切り、セシリアを見て笑いながら付け加える。

「あとオルコット理事長、俺の事は『神博士』じゃなくて『敬介』って呼んで下さい。なんかむず痒いし…親父を思い出しちゃいますから」

「…なら私の事も『セシリア』と呼んで頂けますか？私もむず痒い上…父を思い出してしまいますから」

そう言ってセシリアも微笑み返す。

「それと敬語じゃなくてもいいですよ？『敬介さん』」

「…了解したよ、『セシリア』」

顔を見合わせ笑い合う二人だが敬介が隠し持っていた通信機に通信が入る。

『よう、敬介。無事みたいだな』

「滝さんこそ、ご無事でなによりです」

敬介が通信している間に、セシリアは近くにある船に備え付けの船員用給湯所らしき場所へと向かう。

「オルコット理事長…いえ、セシリアも無事です」

『そうか！良かったぜ…こつちもシージャック犯と真犯人を確保出来た。とりあえず尋問が済んだらまた連絡する』

それだけ言つと通信が切れる。

そこにコーヒーが入ったカップが敬介に差し出される。

差し出したのは、セシリアだ。

「あの、他に無かったのでよろしければ泥み…コーヒーはいかがですか？」

「…昔は上流貴族の飲み物だったんだよ？ありがとう、勿論頂くよ」

セシリアに苦笑しながら、しかし心遣いに感謝しながらも敬介はコーヒーを飲んで

むせる。

「あ、あのやっぱりお口に…?」

「い、いやそんな事はないよ…ちょっと気管に入っただけだから」

心配そうに敬介を見るセシリアにいつものように爽やかな笑顔で答える敬介。せつかくの心遣いを無駄にはしたくない。

（しかし何が入っているんだ…砂糖でも塩でもない…この味の正体は…）

給湯所の机を見れば、答えを悟る。

（…『にがり』か、それも大量の）

忘れていた。彼女は…セシリアはあの豪快なりサとあの料理下手なジョージの血を引いてたんだ。

セシリアはまだじっとこちらを見ている。

善意とあらば、覚悟を決める。

爽やかな笑顔を崩さずに最後まで飲む。

(『おやっさん』の…『C O L』のコーヒーが懐かしい…)

敬介が飲む、セシリアのコーヒーは、苦い。

「さて、と…おい千冬、殺すなよ？そのエド・オルコット副理事長にはまだ聞きたい事があるからな」

滝和也は神敬介と通信を終えると、エド・オルコットを『尋問』している織斑千冬に声をかける。

既にエドの顔はかなり腫れ上がっている。

「私の生徒に手を出した報いです。本当なら腕の一本や二本くらいはへし折ってやりたいくらいなんですが」

千冬はしぶしぶ顔を殴っていた手を止め、引き下がる。

「しかし驚いたぜ…ファントム・タスク『亡国機業』と手を組んでセシリア嬢を始末しようなんてよく考え付いたもんだ」

和也は感心したようにエドに言うが目は全く笑っていない。

「あんたとしては『亡国機業』がセシリア嬢を殺さずとも、組織で連れ去ってくればいいって思ってたんだろうな。そうすりゃ社会的には死んだも同然だ。そして『目撃者』のあんたが彼女を死んだと証言して適当に死亡届を出せば遺産があんたの下に転がりこむ。例えば他の二人と分割でも十分な額の、な」

エドは震えて答えない。

「…これからあんたには『亡国機業』のISS部隊に俺が言う通りに通信して貰おうか？断れば…どうなるかは分かるよな？」

それだけ言うと和也はエドに拳銃を突き付け、安全装置を外し、引

き金に指をかける。

「さて、答えを聞こうか？」

そろそろ夜も明けようという海の上を、5機のISが飛行していた。

「全く、『幹部会』の連中も人使いが荒いねえ…」

「仕方ないだろ、男共はみんなやられちまったんだし」

「だいたい『セシリア・オルコット及び専用機の確保、最低でも機体データの奪取は絶対』なんて無茶苦茶もいいところさね」

「だからこそあの男の暗殺計画は渡りに船ってヤツだったけどね」

『亡国機業』は目下最大の脅威である『マスキドライダー』対策の為にそれに対抗し得る兵器と人材…高性能なISと優れた操縦者を求めている。

だが操縦者は大抵どこかの軍にいるか、IS学園にいるかでガードが厳し過ぎる。

そこにセシリアから遺産を奪う事を目論むエド・オルコットが『亡国機業』と接触し、遺産さえエドに確保出来ればセシリア・オルコット及びその専用機の生殺与奪の権は『亡国機業』側に一任する、という条件で『亡国機業』はエド・オルコットが立案した『セシリア・オルコット暗殺計画』に協力した。

エドとしても遺産が自分に来るならばセシリアの身などどうなろうが知った事ではない。だから『亡国機業』が生きたまませシリアを連れ去ろうが問題無かった。

「しかしまあ、そんなチンケな理由で国際規約踏み躪って姪の命を狙うなんざ終わってるね」

「だからこそ標的にボートで逃げられるなんてヘマやらかすのさ…見つかったかい？」

「駄目だ、反応がない」

彼女達はエド・オルコットから『セシリアがボートで海に逃げたので探してほしい』という通信を聞き付けて出撃してきた。

そして見つからないと見ると『メルクリウス』号の甲板に降り立つ。

「見つからないか…少し依頼者に…」

「探している物なら！」

「こちらにございますわ！」

女達は声がした方を見る。

そこにはドレスではなくISスーツを着用したセシリア・オルコットと

タキシードから半袖の白い服に青いジーンズというラフな格好に着替えた神敬介が並び立っていた。

『乗客の避難はばっちりだ！二人とも存分に暴れてこい！』
スピーカーから船中に滝和也の声が響き渡る。

「なら行こうか！セシリア！」

「はい！敬介さん！」

そして二人は既に戦闘体制に入った5機のISを睨み据える。

―ありがとう、親父。俺は親父がくれたこの身体で、心で、魂で―
海を、人々の自由を、平和を、希望を、未来を、笑顔を―そしてセ
シリア・オルコットと、彼女に託された母親のリサと、そして父親
のジョージの思いを守る事が出来る―

―だからこれからもずっと見ててくれ、親父

―これが俺の―息子、神敬介の―仮面ライダーXの生き様だ！！

セシリアは左耳の青いイヤークラスに手を添える。

敬介は両手を腰で構えた後上に突き上げ『X』字になるように開いた後片手を腰に引き、もう片手を斜め前に持っていく

「大变身!!」

イヤークラスから量子化されたISの装甲が展開され、セシリアの身体を包む。

『マーキュリー回路』が作動し、敬介の肉体を『カイゾーグ』のそれに換え、銀の仮面…『レッドアイザー』と『パーフェクター』が装着される。

「望みとあらば私が!!」

「そして俺が相手をしよう!!」

そして父と母が愛した海の色を受け継いだ蒼い雫…第3世代IS『ブルー・ティアーズ』を身に纏ったセシリア・オルコットと

父から受け継いだ心と魂を仮面に変え、生まれ変わった肉体で空と

海と大地を駆けながら自由と平和を守る銀の騎士…5番目の仮面ライダー『仮面ライダーX』は並び立ち、愛する海を汚す悪へと挑みかけた。

「ライドルホイップ！」

仮面ライダーXはベルトから『ライドル』を引き抜くと乗馬用の鞭に似た『ライドルホイップ』へと変形させ、近接ブレードで斬り掛かるISS機と切り結ぶ。

「こいつ！スピードもパワーも…こつちより上だつてのかい！？」

単身挑んでいるにも関わらず仮面ライダーXの磁力を含んだライドルホイップの斬撃の数々は確実にISSを捉え、そのシールドエネルギーは順調に削られていく。

「この、距離を取るんだ！ヤツには飛び道具は無い！離れて撃ち続けなければいつか…！」

そう言つて1機はスラスターを噴かし仮面ライダーXから距離を取る。そしてアサルトライフルを呼び出し仮面ライダーXへと向けて発砲する…

「ご協力感謝致しますわ！これで敬介さんへの誤射の心配はございませんもの！」

前に全方位からのレーザーとミサイルの雨にさらされ、そのISは為す術なくシールドエネルギーが全て削り切られ、『絶対防御』を発動させながら撃墜される。

撃墜したのは『ブルー・ティアーズ』を身に纏ったセシリアだ。彼女は機体名の由来ともなった遠隔操作攻撃端末『ブルー・ティアーズ』を展開していた。

『ブルー・ティアーズ』は遠隔操作で相手の死角へと回り込み敵の全方位から攻撃可能な防御や回避が困難な非常に強力な攻撃手段である。
オールレンジ

反面操作が非常に難しい。端末と自機、僚機、敵機的位置を瞬時に判断し、端末をどう配置し、どのタイミングで、どう攻撃するかを素早かつ的確に決定しなければ端末など只のハリボテに過ぎない。

セシリアもそれらを戦闘の片手間に行える程熟達している訳でも、人間離れしている訳でもないで足を止めて端末の操作に集中しなければならぬ。

言い換えれば『ブルー・ティアーズ』を展開している間は他の武器との連携はおろか防御も回避も出来ず、セシリアは全くの無防備となる。

「隙だらけだよ！セシリア・オルコット！」

現にそれに気付いた1機が近接ブレードを持ちスラスタを噴かしてセシリアに突撃しようとしている。

判断としては決して悪くはない。むしろ最善に近いとも言える…相手がセシリア一人であつたならば。

「それはこちらの台詞だ！X斬り！」

「お美事でございますわ！」

セシリア目がけて突撃しようとしたISは仮面ライダーXのライドルホイップによる『X』の字の斬撃をともに受けて沈黙を余儀なくされる。

そう、セシリアに…一見隙だらけに見える『ブルー・ティアーズ』展開中のセシリア・オルコットに近寄るには、優秀過ぎるこの前衛…仮面ライダーXをどうにかしなければならぬのだ。

だからと言って仮面ライダーXを先に始末しようと距離を取れば後衛の『ブルー・ティアーズ』から情け容赦なく放たれるレーザーとミサイルの餌食となる…この前衛後衛の連携を何とかしないかぎりは、3機のISはただジリ貧となっていくだけである。

「クッ…だがこれならどうだい!？」

しかし敵も諦めず3機は分散し、1機は仮面ライダーXの足止めを、1機はXから距離を取り、残る1機はセシリアへと突撃していく。

数の優位を生かした同時攻撃だ。これなら前衛に阻まれる事なくセシリアを叩け、後衛に妨害される事もなく仮面ライダーXをなぶり殺しに出来る。そう判断したが故だ。

「こいつで終わらせてやる！」

「果たして」

「そう上手くいくかな？」

しかし仮面ライダーXもセシリアも慌てない。セシリアは『ブルー・ティアーズ』を展開し、仮面ライダーXから距離を取ったISへと集中砲火を浴びせ、あっさりと海へと叩き落とす。

「気でも狂ったか!？」

そのままセシリアへと突撃しようとしたISはスラスターを噴かす。そしてセシリアへと肉迫し…

「ライドロープ！」

た所を何かに引っ張られ、途中で止まる。

仮面ライダーXは足止め役の敵の攻撃を軽くあしらうと、ライドルをロープ状の『ライドロープ』へと変え、セシリアへと突撃した機体へと投げ付け、見事足へと巻き付ける事に成功していた。

「この!この!引き剥がして…!」

スラスターを必死に噴かしてライドロープを何とか引きちぎろうと藻掻くが、そのような気配は全くない。

元々ライドルはかなり頑丈に作られている。怪力を誇るGOD機関の怪人ですら『ライドルスティック』を曲げる事すら叶わなかったの程なのだ。

ならばと敵のISはスラスターの出力を上げて仮面ライダーXを引き摺っていかうとするが、当の仮面ライダーXの方も小揺るぎ一つしない。

それどころか仮面ライダーXはライドロープごしにISを引っ張ると一本背負いの要領で相手を逆方向へと投げ付け、更に追撃の為に飛び上がる。

「ライドルスティック！」

そしてライドルのスイッチを操作すると、ライドルの形状を両側に握りのついた棒状『ライドルスティック』へと変え、投げられ大きく体勢を崩したISへと追撃を見舞う。

「ライドル脳天割り！」

ライドルによる渾身の一撃を受け、ISは悲鳴と共に『絶対防御』を発動させ、沈黙する。

「こいつ…まさか…『マスクドライバー』！？」

残った1機は敵の正体を悟る。『亡国機業』の計画をISに勝ると

も劣らぬ力で叩き潰してきた11人の仮面の男達…高々5機で勝てる相手では…ましてや代表候補生が駆る専用機まで敵に回して勝てる相手では無かったのだ。

「う…うわああああっ！」

恐怖のあまり必死に逃げようとする最後の1機。

「逃がしませんわ！」

セシリアが『ブルー・ティアーズ』を操作して逃げ道を塞ぐ。

「ロングポール！」

仮面ライダーXがライドルを操作し、長大な『ロングポール』へと変えて棒高跳びの要領で飛び上がる。

「…チェックメイト。将棋で言う『詰み』というヤツですわね」

そして『詰んだ』ISに対して仮面ライダーXは止めの一撃を放つべく大車輪の要領で回転して加速度を付け、X字の体勢となりエネルギーを集約した後必殺の蹴りを放つ。

「X…キイイイイック！！」

その渾身の一撃を受け、最後の1機もまた海へと叩き落とされた。

空が白み、まもなく日の出となる海に浮かぶ『メルクリウス』号の甲板の上に滝和也は立っていた。

IS搭乗者の方は敬介が全部回収し、こちらで纏めてふん縛っていた。

そうやった後は再び航海を開始した『メルクリウス』号の甲板で、特にやることも無くなった和也は独り海を眺めていた。

「しかしまあ…想像以上に黄昏ている姿が似合いませんね、和也さん」

「…千冬」

和也が振り向くとそこには織斑千冬が立っていた。

手にはコーヒーが入ったカップが二つ握られている。

「眠気覚ましに一杯どうですか？」

「おっ、気が利くじゃねえか」

千冬から差し出されたカップを受け取ると和也はコーヒーを一口啜る。

「…微妙。いやおやっさんのコーヒーが旨すぎて舌が麻痺してんのか」

「…微妙で悪かったですね。そのおやっさんという人のコーヒーはそんなに美味しいんですか？」

「ああ、俺が飲んだ中じゃ一番旨いぜ？お前にも一辺くらい飲ませたいくらいだ」

「そうですか…ですが一夏の入れたコーヒーも中々美味しいんですよ？」

「…敵わねえなあ…そんなんだから一夏君に彼女が、お前に彼氏が出来ねえんだよ」

「…まだ独り身の貴方が言える事ですか？」

「やかましい！俺は生涯事件を追いつけて決めたんだからいいんだよ！」

そんな相変わらぬ『漫才』を続けていた二人だがふと千冬が尋ねる。

「あの、神敬介さんは…」

「お前の思ってる通りあいつは『本郷猛』の後輩で、『沖一也』の

先輩さ」

そう言うのと和也と千冬は顔を見合わせ快活な笑みを浮かべる。

「そんじゃ、一つ乾杯といこうか」

「ええ、付き合いますよ」

「なら…仮面ライダーの勝利に」

「セシリア・オルコットの無事に」

「そして俺達の勝利に乾杯、だ」

そして『戦友』二人はカップを合わせて互いの健闘を讃え合った。

（…そして日溜まりの中私達の愛の結晶『ケイスケ』と、和也お義兄様と千冬お義姉様の愛娘『涼子』と『霧子』が3人仲良く遊んで、それを見て私達4人が顔を見合わせ微笑んでいる所に、私の父親代わりとして敬介さんがあの昔と変わらない爽やかな笑顔でやってきて…）

セシリア・オルコットはそんな滝和也と織斑千冬の様子を見ながら妄想に明け暮れていた。

どうやらセシリアの妄想の中ではセシリアと織斑一夏が、和也と千冬がそれぞれ結婚し、セシリアと一夏の間には『ケイスケ』という息子が、和也と千冬の間には『涼子』と『霧子』という名前の子供が産まれるらしい。しかも神敬介はセシリアの父親代わりだそうだ。

そんな和也が聞いたなら笑う事すら出来ずに絶句し、千冬が聞いたなら頭痛を通り越して卒倒しそうな妄想をセシリアがしているとも露知らず、神敬介はセシリアに声をかける。

「…セシリア？」

「も、申し訳ありません敬介さん！別に敬介さんが父親代わりだなんてそんな事は…！」

慌てて首を振り否定するセシリア。しかし

「…なるよ。君が…セシリアがそう言ってくれるなら」

敬介は優しく微笑んで答える。

「君が望むなら、君が許してくれるなら…俺は君の恋も、学業も、未来も、人生も…ずっと応援して、ずっと見守るよ。あの時が君が俺に見た、君の父親ジョージの代わりに…君の父親代わりとして」

「…ありがとうございます。むしろこちらからお頼みたいくらいですわ」

そう言つてセシリアも敬介に微笑み返す。

そしてセシリアは遠い目をして呟く。

「…もしかしたら私が彼を…織斑一夏を好きになつたのもただ彼に父の姿を見てしまっただけなのかも知れませんか…」

「そんなものさ、恋なんて」

セシリアの呟きを遮り敬介が答える。

「どんな恋でもきつかけなんて、案外そんなもんだよ」

敬介は今は亡き恋人…水城涼子を思い浮かべる。

俺は彼女に母を…自分を産んですぐに死んだ母を重ねていたのかも
しれない。

だけど…いやだからこそ言える。きつかけがどうであれ俺が水城涼
子を本当に愛していたように…セシリアもきつとそうだ

「それにきつかけがどうであれ、君が織斑一夏つて子を心から愛し
てるのは本当だろう？」

「…はい！」

ふと二人は海を見る。日の出だ。

そのまま敬介とセシリアは手すりに手を乗せ、並んで日の出と海を
眺めていた。

「…ジョージも、リサも、親父も、そして俺も…この日の出の海が好きだったんだ」

「私も…好きになりそうです」

「織斑―夏君の次くらいに、かい？」

「ええ。あと父と母と…敬介さんの次くらいに」

「ありがとう、セシリア…」

（そしてありがとう、親父…）

それからセシリア・オルコットと神敬介は船が港に到着するまで父が愛し、そして自分もまた愛する海をずっと眺め続けていた。

（後書き）

最後まで拙作をお読み頂きありがとうございます。

最早IS、仮面ライダー双方への冒流行為などはなどと思いつつ
もまた書き上げてしまいました。

最後に、拙作を読んで頂いた事に感謝の意を表しつつ後書きとさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7122y/>

父子の肖像

2011年11月21日04時25分発行